環境配慮型ライフスタイル シンポジウム

主催：環境配慮型ライフスタイル推進協議会

後援：小金井市商工会、小金井市環境市民会議、東京都立多摩科学技術高等学校

エネルギーの新しい考え方

小金井市が取り組んだ市民提案「環境配慮型モデル住宅・環境楽習館（旧愛称・雨デモ風デモハウス）」について、これまで（2010年～）の活動報告と新しいエネルギーの考え方や地域資源についてディスカッションした。専門性の高くなりがちな建築や物理学の考え方と住み慣れたまちの「当たり前」を見直した日常的な視点が、同じテーブルで交わった。

2013年2月16日・都立多摩科学技術高等学校

●パネリスト（敬称略）

谷口信雄（東京都環境局）

黒岩哲彦（㈱アルキテクタ・建築家）

高井毅（㈱小嶋工務店・小金井市商工会）

石原弘一（小金井市環境部環境政策課）

山中元（法政大学院陣内研究室所属）

久保芳恵（元海外ツアーコンダクター）

司会：土肥英生（都市計画プランナー）

進行：池田敦子（NPO法人グリーンネックレス）

ダイジェスト

谷口信雄：エクセルギーハウスは何を目的につくられたか

エクセルギー住居には建築のパラダイムを変える可能性がある、と感じている。日本では概念が定まっていないので、その確立が目的のひとつだ。「エクセルギー」はエネルギーと物質の循環をもたせるもの。エネルギーの消費は東京が一番。また、CO2 の原因の大半が建築にかかわっている。
東京都の地球温暖化対策の流れを受け、当初の目的を着実に展開していただきたい。失敗があったらそれも含めて我々の住まい方、それを直すことで CO2 削減。消費生活の中でエクセルギーってなんだろう？ということを考えて欲しい。

黒岩哲彦：視点を変えてモノを見直す

エクセルギーはエネルギーの新しい考え方です。地球の全ての営みはエクセルギーによって引き起こされています。私たちは快適さの基準に気温を目安にしますが、実験住宅で計測すると室温よりも室内の壁や床や天井の周囲面温度が重要であることが理解できます。エクセルギーハウスは地球に降り注ぐ太陽の熱を雨水を媒介にして集め、気化熱や風の流れを取り入れた設計です。窓を開け閉めする、熱をゆっくりと循環させるアジア型のローテク。身近な自然や人間の営みを生かしていく。エネルギーの基礎の計算方法を変える家です。

山中元：地元で学んだキャンパス生活の成果

大学近くの農家の全面協力を得、他大学の学生も集まって、最近「ベジハウス」を完成させました。小金井の農業は江戸東京野菜の取り組みが活発です。農家の庭先野菜販売所の数も多い。工学部建築科永瀬ゼミの課題は庭先販売所のデザインで、コンセプトは小金井産の野菜や多摩産材の木材を多くの人に知ってもらおうと、間伐材の製材や地元工務店の指導協力を得て組み立てまでしました。地元の藍染専門店のサポートで、自分たちでのれんを藍染したり、野菜スライスを挟み込んだ和紙の天井は外光でシルエットが楽しい仕上げになり「金菜屋」とネーミングしました。

石原弘一：小金井の市民力

市民の方から実験住宅の経過報告がお話されました。モデル住宅は、公募で愛称を「環境楽習館」と命名され、環境に興味を持つ市民の裾野をひろげたいとしているところです。小金井市が他市に誇れる施策に雨水浸透ますがあります。昭和 40 年代の施策で、野川がきれいになった。近隣市でも取り組み、武蔵野台地の雨水涵養を進めています。環境配慮型住宅は、雨水を使って温かさ涼しさの仕組みがあり、小金井市が取り組むことになりました。谷口さんから「エクセルギーの理念をもっと伝える」という宿題ですが、ステップを踏んでいけたらと考えます。

久保芳恵：東京郊外小金井の魅力

先ほど、小金井市では自慢できることがあまりないというお話でした。私は越してきて 8 年ですが、すぐ近くを流れる野川の風景にすごいなあと。ハケという地形で湧水の流れであること、その流れを市民が守ってきたことを最近知り 30 年前の市民活動に感謝しています。小金井には自慢できることがたくさんあります。観光というのはその土地の光を観ることなのです。現在、市民がまちをガイドできる仕組みづくりが検討されています。東京郊外 25 キロ圏で中央線の交通にも、南北にある都立公園の自然環境にも恵まれている。小金井を歩きに来ている人が大勢いることなども知っていただきたいです。

高井毅：空気を使う家づくり（小金井商工会・村越会長代理として）

地元で創業 47 年の工務店とし環境に配慮した住宅づくりでは、先ほど谷口さんが話された寒くなったら首にマフラーを巻きコートを羽織るのと同様に住宅で外断熱の家づくりをしています。日本の昔からある木造を、高気密高断熱ですっぽり包み、家の衣替えを床下で操作します。夏は外の空気を壁の中で回すソーラーサーキットのシステム。空気をどうやって使うかという家づくりです。冷房機器の使用量が削減できたといわれます。当社では、「多摩の木と暮らす家」を勧めるウッドマイレージで、あきる野の森の循環に寄与しています。

永瀬克己：「小金井学」と「雨風ゼミ」

エクセルギーは、生き方に繋がっています。宇宙からミクロ世界まで視野に入れ、各人の位置から行動してゆく。前年度比伸び率を競う主義から、環境のゆたかさを競うことへ。歴史的に培ってきた和の空間は「何もない空間」、設えでかわる「人間の振る舞いの為の原空間」です。利便を求め過ぎ溢れたモノに空間と時間を奪われたことから脱し、環境に身を開放する。モノ事と対話することで「バランス」がみえてきます。その立ち居が、美しい「作法」となっていることを望みます。小金井にある大学の学生たちによるフィールドワークが、地元のみなさんとの共有ビジョンになっています。

池田敦子：森の役割を持つ実験住宅

シンポジウムの底流には、CO2 削減には、限りある化石燃料を遠方から運び大量生産された電気エネルギーを大量消費する都市に遠くから運び込む生活スタイルではなく、今、ここにある身近な自然のエネルギーを使う技術（エクセルギーの生活）を普及するために何ができるか、という問いがあった。
パネラーの皆様の報告を受け、シンポジウムで共有できたことは、もっと、きちんとエクセルギーに向き合おうということと、今後も、このようなオープンな情報共有といろいろな立場の人が話合う場が必要という 2 点だった。
雨風ハウスの実証データの記録は新たな技術の提案に活用し、普及には制度や施策の転換も必要ではないかと、実験住宅が私たちに問いかけている「こと」ではないだろうか。

会場から

土屋正忠（衆議院議員）

武蔵野市長を 23 年務め、その間に中央線高架化事業における「環境共生」の視点を提案する市民団体グリーンネックレスとの関わりから本日は伺った。当時、市では公共施設設計では、冬あたたかく夏は涼しいパッシブソーラーの考え方や燃料電池もすでに導入していた。地域社会・現場から先駆的な取り組みをする。特に住宅は身近なテーマ。現在は国会議員だが、国の役割は制度をつくることで合意形成に時間を要する。その点、市長は範囲は小さいが権限がある。小金井市環境配慮型住宅を見学したがこれからに期待できる。

小渕昌夫（小金井市商工会、武蔵野法人会経営研究会担当）

システム検証された成果を今後どのように使うのか。施設はどのように使われたのか？これまで何人が利用しているのか？
→石原：昨年秋からの使用申請数や見学体験された方は述べ 2500 名でした。市では、市報等で告知し、施設を市民の方々にアクティブに使っていただきたい、と考えています。